

Ichthyological Research 69 卷 3 号掲載論文 和文要旨

ヒメキチジ科ヒメキチジ属 *Plectrogenium* (カサゴ亜目) の 8 新種の記載を伴う分類学的再検討

松沼瑞樹・上阪健太・山川 武・遠藤広光
モノグラフ 69(3): 299–351

ヒメキチジ属 (カサゴ亜目: ヒメキチジ科) の分類学的再検討の結果, 8 新種を含む次の 10 有効種を認めた: *Plectrogenium nanum* Gilbert, 1905 (ハワイ諸島), *Plectrogenium barsukovi* Mandrytsa, 1992 [ナスカ海嶺 (南東部太平洋)], *Plectrogenium capricornis* sp. nov. (ニューカレドニア), *Plectrogenium kamoharai* sp. nov. (新称: ヨロイヒメキチジ) [日本 (駿河湾から土佐湾, 東シナ海)・台湾], *Plectrogenium kanayamai* sp. nov. (新称: パラオヒメキチジ) (天皇海山・九州-パラオ海嶺・台湾), *Plectrogenium longipinnis* sp. nov. (マルキーズ諸島), *Plectrogenium megalops* sp. nov. (ソロモン諸島), *Plectrogenium occidentalis* sp. nov. (マダガスカル), *Plectrogenium rubricauda* sp. nov. (ヒメキチジ) [日本 (駿河湾から日向灘)], *Plectrogenium serratum* sp. nov. (バヌアツ). 各種は, 胸鰭鰭条数, 頭部の棘と鱗の状態, 体各部のプロポーシオンおよび色彩の組み合わせによって互いに識別される. 本論文ではタイプ標本に基づいて *P. nanum* と *P. barsukovi* を再記載するとともに, 本属の種の検索を示した.

(松沼: 〒631-0052 奈良市中町 3327-204 近畿大学農学部環境管理学科; 上阪・山川・遠藤: 〒780-8520 高知市曙町 2-5-1 高知大学理工学部生物科学科)

沖縄県から得られたイズハナダイ属 (スズキ目: ハタ科: ハナダイ亜科) の 1 新種 *Plectranthias kojii* ミカヅキハナダイ (新称)

小枝圭太・武藤望生・和田英敏
本論文 69(3): 352–360

沖縄諸島浜比嘉島の水深 150 m から得られた 1 標本 (標準体長 49.4 mm) に基づき, イズハナダイ属 (スズキ目: ハタ科) の 1 種 *Plectranthias kojii* (新称: ミカヅキハナダイ) を新種として記載した. 本種は *Plectranthias ryukyuensis* Wada, Suzuki, Senou and Motomura, 2020 チュラシマハナダイに最も似るものの, 形態的特徴やミトコンドリア DNA の部分塩基配列により *P. ryukyuensis* を含む同属他種と明瞭に識別される. *Plectranthias kojii* は *P. ryukyuensis* と比較して, 以下の特徴により識別される: 胸鰭は 12 か 13 軟条; 側線下方鱗列数が 10, 上神経骨は 2 本; 頭部は小さく [頭長は 42.5% SL (標準体長)]; 頭部背縁は丸みをおび,

眼窩後方でやや膨らむ；眼は小さく（眼径は 11.9% SL），眼の前背縁は頭部背縁より突出しない；尾鰭後縁はわずかに凹む；背鰭第 4 棘は長い（20.0% SL）；腹鰭前長は短い（34.8% SL）；胸鰭は短い（37.0% SL）；腹鰭棘は長い（19.6% SL）；体には背鰭第 7 から 9 棘基部から尾柄部中央に至るオレンジ色の弧状帯がある；吻部，峡部，両顎，項部および背鰭棘状部に黄色がかったオレンジ色の斑点や斑紋をもつ。

（小枝：〒113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1 東京大学総合研究博物館；武藤：〒005-8601 北海道札幌市南区南沢 5-1-1-1 東海大学生物学部海洋生物科学科；和田：〒250-0031 神奈川県小田原市入生田 499 神奈川県立生命の星・地球博物館）

サケ科サクラマス *Oncorhynchus masou masou* の側線系とその神経支配

中江雅典・長谷川 功

本論文 69(3): 362-371

サケ科サクラマス *Oncorhynchus masou masou* の側線系とその神経支配を観察した。本種の側線系は、8 の頭部側線管（眼上，眼下，耳，前鰓蓋，下顎，後耳，上側頭および側頭部軀幹），1 の軀幹管および 9 の表在感丘群（吻，鼻孔，前眼下，後眼，頬，上側頭，前背側，副軀幹および尾鰭）から構成されていた。これらの構成要素は、基本的に他の多くの真骨類と同様であったが、前眼下の感丘群があることに加え、眼下，下顎および鰓蓋の感丘群がないことで特徴的であった。また、本種の側線系を同じサケ科のカラフトマス *Oncorhynchus gorbusha* およびサケ *Oncorhynchus keta* とも比較した。

（中江：〒305-0005 茨城県つくば市天久保 4-1-1 国立科学博物館動物研究部；長谷川：〒062-0922 北海道札幌市豊平区中の島 2 条 2 丁目 4-1 水産研究・教育機構水産資源研究所）

西オーストラリアから得られたフサカサゴ科の 1 新種 *Phenacoscorpius longicaudalis*，および *Phenacoscorpius adenensis* のインド洋南東部からの初めての記録

Kunto Wibowo・本村浩之

本論文 69(3): 372-380

インド洋東部，西オーストラリア州沖の水深 228-990 m から得られた 19 標本に基づき，フサカサゴ科の 1 新種 *Phenacoscorpius longicaudalis* を記載した。本新種は胸鰭軟条数が 17-19（最頻値 18）で中央の軟条が分枝する，口蓋骨歯を欠く，前鰓蓋骨第 2 棘が小さく未発達である，通常涙骨側棘を欠く，頭幅が標準体

長（以降体長）の 14.7–16.9%（平均 15.4%），吻長が体長の 9.9–11.0%（10.5%），眼窩径が体長の 13.4–16.1%（15.1%），尾鰭長が体長の 25.6–29.5%（27.6%），および尾柄長が体長の 19.1–23.8%（20.6%）であることから同属他種と識別される。また，本新種と同属の *Phenacoscorpius adenensis* が西オーストラリア州沖から 5 個体採集された。これらは本種のインド洋南東部からの初めての記録となるため，詳細な記載を伴い報告した。

（Wibowo : Research Center for Oceanography, BRIN, Jl. Pasir Putih I, Ancol Timur, Jakarta 14430, Indonesia ; 本村 : 〒890–0065 鹿児島市郡元 1–21–30 鹿児島大学総合研究博物館）

FA (fluctuating asymmetry) によるリュウキュウアユ島嶼個体群の絶滅時における遺伝的多様性の推定

Linh Manh Ha · 岡 慎一郎 · 井口恵一朗
短報 69(3): 381–386

本研究では，1970 年代後半の沖縄島産リュウキュウアユを絶滅に導いた要因の手がかりを求めて，調査が行われた。現存する奄美大島の野生個体群と飼育個体群の FA (fluctuating asymmetry) を比較したところ，遺伝的多様性を消失した飼育個体群でより高い発生頻度を示した。一方，ホルマリン浸漬標本として残された沖縄島絶滅個体群の FA は，奄美大島のいずれの個体群よりも低い発生頻度を示した。以上から，沖縄島からのリュウキュウアユの絶滅に際して，遺伝的多様性の減少が関与した可能性は高くないことが推察された。

（Ha · 井口 : 〒852–8521 長崎市文教町 1–14 長崎大学大学院水産環境科学総合研究科 ; 岡 : 〒905–0206 沖縄県国頭郡本部町石川 888 沖縄美ら島財団総合研究センター）

東南アジア在来コイ科 *Puntioplites proctozysron* の初期形態発育の記載

森岡伸介 · Pisit Phomikong · Piyathap Avakul · Tuantong Jutagate
短報 69(3): 387–392

東南アジア在来コイ科魚類 *Puntioplites proctozysron* について，人工飼育された孵化後 9–40 日の仔稚魚の形態発育を記載した。全ての体節は 9 日齢の屈曲期仔魚で観察され，各部位の相対成長は稚魚期に入り一定であったが，体高，上顎長比ではその後も増加傾向が見られた。9 日齢仔魚ではすでに背鰭，尾鰭の鰭条が出現しており，その後，臀鰭，腹鰭，胸鰭の順で鰭条が出現し，35 日齢の体長 13.7 mm で全鰭条が定数に達した。黒色素胞は 9 日齢仔魚では頭部に分布するのみであったが，体長 11.0 mm 以上（後屈曲期仔魚）では，躯幹部

で増加し、稚魚期には背側全面を覆う様相であった。

(森岡：〒305-8686 茨城県つくば市大わし 1-1 国際農林水産業研究センター 水産領域；
Phomikong：Department of Fisheries, Inland Fisheries Research and Development Division, Bangkok,
Thailand；Avakul：Mahidol University, Nakhonsawan Campus, Nakhon Sawan, Thailand；Jutagate：
Faculty of Agriculture, Ubon Ratchathani University, Ubon Ratchathani, Thailand)

形態形質と遺伝的証拠による日本初記録のウナギ目ウミヘビ科 *Ophichthus celebicus* と *O. macrochir* の仔魚の同定

遠藤詢介・日比野友亮・望岡典隆

短報 69(3): 393-398

九州と四国沿岸で採集されたウミヘビ科の葉形仔魚 2 タイプは、DNA バーコーディングにより日本初記録種である *Ophichthus celebicus* (新称：トリノコウミヘビ) と *Ophichthus macrochir* (新称：クロナガウミヘビ) にそれぞれ同定された。*Ophichthus celebicus* の葉形仔魚は第 8 筋隔部以降の体側正中線下部筋隔上に線状の黒色素胞を有すること、*O. macrochir* の変態期仔魚は 1 から 5 筋節毎に体側正中線下部の筋隔に沿って内在性黒色素胞を有することで、既報の日本産ウミヘビ科仔魚と識別される。

(遠藤・望岡：〒819-0395 福岡県福岡市西区元岡 744 九州大学農学研究院；日比野：〒805-0071 福岡県北九州市八幡東区東田 2-4-1 北九州市立自然史・歴史博物館)